



3月28日に、富士霊園で妹の納骨式を終えました。妹の亡骸の最後の欠片を土に返す、遠く離れた墓苑に納骨するという痛切な別れは言葉に出来ない思いがありました。



この日は心配された天候も不思議に守られて、桜が咲き始めた静かな墓園で、穏やかに、和やかに、納骨式をすませました。9歳も年下の妹でしたから、ただ「可愛い、従順な妹」として、姉貴ぶって可愛がっていただけだったこと、妹の心のなかの様々な思いに鈍感だったこと、担っている課題への共感などが薄かったことを思い、ゆるしてほしいという気持ちで一杯になりました。

29日に、みぞれの降る中を箱根の麓から、帰ってきました。春なのに、しかもあちこちで桜が咲いているというのに、この日に雪が降ってきました。エルミタージュの窓から眺めると庭の桜はかなり咲いていました。でも、芝生は雪で白くなっていました。みぞれは私たちの涙のように感じ、また、この白い雪は、妹が天から送ってくれた一つの挨拶のような気持ちがしてきました。雪深い津軽にも遅い春がやって来て、一気に桜の花を咲かせる、ちょうどその頃に生まれた妹にふさわしい桜の中の春の雪、これが妹の挨拶だったかもしれません。

妹の名前にある「静」という漢字は「青」と「争」からなり、妹は気に入っていました。「青」は信仰を表現し、「争」は我が物にしようと戦うという意味です。

主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。(出 14:14)

「静」こそ、信仰者に求められる姿勢です。またイザヤも言っています。

まことに、イスラエルの聖なる方／わが主なる神は、こう言われた。「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」と。(イザ30:15)

また妹がとても気に入って購入してしまったという、「青い薔薇」と題されたステンドグラスを形見としてもらいました。不思議なデザインで、私には十字架上の主イエスのように見えます。毎日眺めては、妹の気持ちを少しでも分かりたいと思っています。この日の雪は妹の思いを伝えるものだったのではないかと、妹の信仰を心に刻みたいと思いました。

ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください／わたしが清くなるように。わたしを洗ってください／雪よりも白くなるように。(詩編51:9)

